

13) 吐血を主訴とした胃癌の臨床的検討

齋藤 興信・家田 学 (長岡中央総合病院) 内科
 富所 隆・戸枝 一明
 織田 克彦・杉山 一教

過去5年間の、吐血血にて発見され手術を受けた胃癌33例について検討した。これは同期間の全胃癌手術患者の5.1%に当たった。内訳は男性25例、女性8例で、60才台から70才台の高齢者にピークを認めた。33例中24例に緊急内視鏡を施行したが、そのうち8例が初回には良性潰瘍と診断され、吐血血時の良悪の鑑別が困難であることが示唆された。癌の肉眼分類では、IIc及びBorr. II, Borr. IIIの潰瘍形成型が多く見られた。癌の占拠部位は、C領域に最多で以下M, Aの順であった。また、小彎側が最多で以下復壁、前壁の順であった。組織分類では分化型と低分化型がほぼ同率であった。深達度では深層に達しているものが多く認められた。33例中待期手術が31例と大多数を占めていたが、治癒切除不能例が10例認められ、吐血血を来す胃癌では高度進行例が多いことが示唆された。

14) 胃切除後の骨障害に対する治療と新しい診断法について

福田 稔 (白根健生病院外科)
 仲川 順二 (同放射線科)
 浅井 英一 (富士メジカル株式会社) 技術部

胃切除後に起る骨軟化症、骨粗鬆症やう蝕菌は、術後に牛乳を飲まない牛乳不耐症や、Billroth II法症例に多く発現する事を度々報告してきた。今回は当病院において胃切除された症例について、約5年間に亘る骨塩量の変化を、牛乳摂取状況より調べると共に、vitamin Dや、calcitoninで治療された症例の骨塩量の変化について報告する。骨塩量の測定に関しては、現在bone mineral analyzer (BMA)法や、microdensitometer (MD)法が用いられているが、これらはいずれも高価であり、特にMD法の測定には専門家が必要であり、しかも測定には時間がかかる欠点がある。我々はdensitometerにcomputerを組合せることにより、安価で、操作も容易で、再現性も高く、BMA法やMD法と高い相関々係を示す測定法を考案したので報告する。

15) 脾腫瘍との鑑別が困難であった、残胃粘膜下腫瘍の2例について

飲沼 泰史・高野 邦夫 (長岡赤十字病院) 外科
 神谷 岳太郎・小林 清男
 和田 寛治
 佐藤 俊郎・遠藤 次彦 (同 内科)
 石川 忍・川村 正

症例1は67歳の女性で、20年前に胃潰瘍で広範囲胃切除術を受けている。上腹部に異常陰影を指摘され今回入院となった。術前、内視鏡、残胃透視、ERCP、腹腔動脈造影で、脾外性腫瘍の存在も疑われたが、CT、超音波検査にて嚢胞状の形態を認めたため、脾嚢胞の診断で開腹術を行った。手術結果は残胃平滑筋腫であった。

症例2は52歳の男性で、10年前に胃早期癌で胃垂全摘術を受けている。左季肋部に腫瘤を触知し今回入院となった。症例1と同様に術前は内視鏡、残胃透視、腹腔動脈造影では確診が得られなかったが、CT及び超音波検査より脾嚢胞の診断で開腹術を行った。手術結果は残胃平滑筋肉腫であった。

残胃粘膜下腫瘍は本邦では比較的稀であるが、術前脾嚢胞との鑑別が困難であった2例について今回報告した。

16) 当院におけるエタノール局注療法の成績

藤田 信也・岩田 文英
 山田 八郎・田尻 正記 (佐渡総合病院内科)
 本田 康征・瀬川 宗助
 藤野 正義 (同 外科)

対象は、1984年4月から、1985年4月までの1年間に、佐渡総合病院において純エタノール局注療法を施行した出血性潰瘍16例である。内訳は、胃潰瘍15例、十二指腸潰瘍1例であった。全例に一時止血が可能で、5例、31.5%に再出血を認めた。内2例が緊急手術、1例が待期手術となった。有効率は、75%であった。出血型から見ると、動脈性60%、静脈性75%、露出血管のあるもの、新鮮凝血のあるもの86%と有効率に差を認めた。基礎疾患としては、中枢神経系のものが多かったが、有するものでは63%、無いものでは88%と有効率に差を認めた。

一方、手術を行なった3例について、病理組織所見と比較検討を加えた。止血された部位では、組織への細胞浸潤に加え、血管壁は好酸性無構造の凝固壊死をおこし、血栓の形成を認め、有効なエタノール固定が行なわれたことを裏づける所見が得られた。